仮皇居になった伏見宮貞成親王御所の寝殿(仮皇居時代の南殿) の上段と平面

THE JODAN AND THE FLOOR PLAN OF PRINCE FUSHIMINOMIYA SADAFUSA'S PALACE, USED AS A TEMPORARY IMPERIAL PALACE

鈴木 賢次*

Kenji SUZUKI

During the Muromachi Era, Prince Sadafusa's palace was converted into a temporary Imperial Palace of the Emperor Gohanazono. I drew the floor plans of the Shinden(the main building) of these two periods. The building measured 7 ken east-west and 6 ken north-south. The east room floor was covered by Tatami mats and one part was lower, which was called the Jidan(Gedan) and another part the Jodan. Such style was being developed in the upper Kuge's residences before the Ohnin War, but were not yet widely practiced. There were changes in floor plans including Jodan and Zashiki-kazari to reflect the hierarchy along with the establishment of the Shoin-zukuri style.

Keywords: Muromachi Era, Prince Sadafusa's palace, Imperial Palace,
Kuge's residence, Shinden, Jodan

室町期, 貞成親王御所, 内裏, 公家住宅, 寝殿, 上段

1. はじめに

室町期、土御門東洞院の応永度内裏と康正度内裏の間に伏見宮貞成親王の京都御所が内裏として用いられた。応永度内裏が嘉吉3年(1443)9月に焼失したために、貞成親王の御子であった後花園天皇が伏見宮御所を仮皇居としたのである。内裏とされた期間は同年9月から康正2年(1456)7月である。この御所に関しては、川上貢氏の研究¹⁾があり、貞成親王の日記である『看聞日記』の記事から建物配置や寝殿について検討され、とくに貞成親王時代の建物については詳細に述べられている。

それによれば、この御所の地は一条東洞院にあって、ここに貞成親王が住んだのは永享7年(1435)末からの8年間であった。そして、親王の御所はそれまでの内裏や仙洞御所に比べて規模は小さいが、当時の他の宮廷貴族の住宅に比較すると規模の整った部類に属していたとしている。建物は寝殿、一對、台所、隨身所、四足門、棟門、上土門が営まれていたが、これらは後小松院の仙洞御所にあった施設(応永23~24年建築)を移建したもの

である。さらに、寝殿が会所、持仏堂、常御所、御湯殿上、御末(男末)の各室を含む一棟の総称であると同時に、その内の南面中央の室の呼称であったことを示し、これらの居室の位置や性格を論じている。会所には下段(下壇)の記事があることによって、一方で会所に上段があったことが指摘されている。

なお、同氏の研究では復原平面図の作成が試みられていない。『看聞日記』の記事からでは、寝殿の桁行間数と梁行間数が不詳、さらに、各居室の広さが判然としないこともあって、その試みに難しさがあったと考えられる。また、会所の上段・下段についても言及はされているものの、上段成立の過程にかかわる問題²⁾としての論及はみられず、その課題は残されている。貞成親王の御所の後、仮ではあるが内裏として用いられ、寝殿がその中心建物として継承されたことを考えると、室町期の住宅を検討する上で、この寝殿は貴重な事例になるといえる。したがって本稿では、『看聞日記』の記事を改めて検討するとともに、内裏となった時期を含めて、この

* 日本女子大学家政学部住居学科 教授・工博

Prof., Dept. of Housing, Japan Women's Univ., Dr. Eng.

期の史料を分析し、貞成親王の御所時代および仮皇居時代を通じて中心建物であった寝殿（後の南殿）の復原平面図の作成を試み、室町期の住宅における上段の特徴とそれにもとづく平面構成の性格を考察することを目的とした。

2. 貞成親王御所時代

川上氏の研究によれば、貞成親王の御所時代の寝殿は、南面する寝殿といわれた室を配して、その北側に常御所、東南側に持仏堂、東側に会所、西側に南御方（親王夫人の南御方の居室の呼称）があり、南から北へ中門・公卿座・南御方・御湯殿上・御末と続いていた。そして御末は常御所庇間に接していた。寝殿は母屋と庇からなり、庇は東西行3間、東側に障子が立ち、西側には妻戸が立てられ、公卿座を経て中門に連絡していた。常御所は母屋と庇間とから構成され、そこに廉代が設けられていた。これらによって、配された居室とその居室の位置関係が分かるので、概略の平面は想像できる。しかし、先にも述べたように全体の柱間数や、各居室の広さが不明なので、平面図の復原を試みるまでには至っていない。

『看聞日記』（以下『日記』とする）から居室の広さが判明する記事を改めて検討する前に、貞成親王の御所であった期間の増・改築について同日記から見ておきたい。

永享8年(1436)正月	持仏堂の室礼の造作。
2月	台所の室礼の造作。
4月	庭垣を作る。 東妻土戸を作る。
5月	西向、南御方前に日隠を作る。
閏5月	机を作る。
8月	間中 ³⁾ を造作。 常御所の廉代、会所、南御方に 畳数帖を差す。 壁塗。
9年(1437)12月	南御方に棚を作る。
10年(1438)正月	御湯殿（台所南面、対屋東面） の作事。
2月	奥宿を作る。
9月	常御所庇間に茶湯座敷を作り、 御末の棚内に押入る。

上記のような造作から判断して、貞成親王時代を通じて寝殿に限れば大きな変更はなかったと考えられる。

次に、各居室の規模について検討すると、寝殿と呼ばれた室は南庇が東西3間であり、それからみて同様に母屋側の室の東西も3間であろう。この室の南北行は七夕の会所室礼で、「寝殿相合一間〔東端〕障子撤、奥へ二間押入、屏風二双会所立廻」⁴⁾（〔〕内は割註。以下同じ）とある。会所を寝殿の東西行1間、南北行で2間を

拡張している。七夕会所の室礼であるので、これによって寝殿とした室の南北行を直ちに2間と断定するわけにはいかないが、2間以上あったことは確実である。

寝殿の東側と西側の東西行の間数については、修法始行の道場の室礼と経営会所の室礼の記事に見いだせる。前者では、「〔頭書〕寝殿三間為道場、東間二間懸翠簾、為御聴聞所、西間一間女中為聴聞所」⁵⁾とある。これは修法道場の室礼であるので、寝殿の3間は上に述べたように問題ないとして、その両側はここに記された間数ないしそれ以上としておくのが至当であろう。後者においては、「南御方〔西面、〕御湯殿上相合障子二間撤之、〔中略〕寝殿東二間立屏風、〔西南障子際〕為御休所」⁶⁾とあり、寝殿東側は上と同じであるが、西側については南御方と御湯殿上の境の障子が2間であるので、東西行が2間であったと考えられる。

寝殿の東側には、会所と持仏堂が配される。会所については上記の七夕の会所室礼の記事のほかに、「申刻鳥一、常御所簾代より入、経会所之内寝殿東向四間畳上糞汚、事之様不審、」⁷⁾とあり、その6日後に「晝鳥又内へ入、会所畳汚糞、及兩度不思議事也、令穢」⁸⁾とある。両記事は糞で汚れた場所が会所内ということで密接に関連していると判断され、「会所之内寝殿東向四間」には、会所の一部で寝殿とした室の東部分の広さが示されていると考えられる。したがって、これから会所全体の広さは分からないにしても、上に述べた寝殿とした室の南北行が2間ないしそれ以上ということと、その東側が東西行2間以上ということとを合わせて推察すれば、寝殿とする室の南北行2間、寝殿の東側が2間であったことになる。持仏堂については、「持仏堂本尊自伏見奉渡安置之、〔寝殿巽角室礼、〕」⁹⁾とあるので、寝殿の南東部、つまり会所の南側に位置すると考えられる。なお、会所全体の南北行や持仏堂の規模に関しては『日記』の記事に手懸かりがない。

寝殿の北側に配された常御所については、北側に庇間、その内側に簾代と呼ばれる部分があった。寝殿とする室と東西行が揃っていたとすれば、東西行3間になるが、『日記』からは不明である。また、南北行の間数はそこに母屋や簾代、庇間が構成されていたので、最小の場合で3間はあったものと思われるが、正確にはやはり知ることができない。ほかに南御方、御湯殿上、御末、公卿座や中門などがあるが、これらの規模も『日記』中には見出せない。ただし、川上氏も述べられているように、常御所、御湯殿上、御末がとなり合っていた¹⁰⁾。なお、中門が公卿座につながる位置は公卿座の南、または西であるが、どちらかに確定できない。

以上、貞成親王時代の寝殿の規模について不明な点が多々あるが、判明した範囲でいえば、東西行が寝殿とした室が3間、その東側が2間、西側が2間となり、建物

懺法道場の室礼から中央の4間分は同一の床高であったと考えらるるので、床に段差があったとすれば北側の1間分である。次段は「於次段奉待入御」³⁸⁾とあって、控えの間として使われることもあった。また、「東面、落段云々」³⁹⁾ともあるので、この次段は通常の母屋の床より一段下がっていたであろう。

貞成親王の御所時代においても、川上氏がすでに指摘しているように⁴⁰⁾客人として天皇や公方が会所に着座し、「其後按察已下着座、〔会所下段〕」⁴¹⁾として、公卿たちが会所の下段に着座している。また、会所を仏事の導場にしたときには「男供会所下壇候」⁴²⁾と記している。会所が東面御座敷に当たると考えられるので、この下段(下壇)は仮皇居時代の次段と同じであったと判断される。前述した七夕の室礼で、会所と南面中央の寝殿が合わせて用いられた。両者の境界では床の高さに相違がないであろうから、この通常の床より低かったのは、北側の1間分であったと推測される。なお、上記の記事A、Bによって畳の敷き詰めと上段・次段(下段)との関係が窺えるので、それに関しては次節でさらに検討する。

そのほかの室についてみると、朝餉は南殿内にあって、その西側に位置する殿上に近い部分と思われる⁴³⁾ので、貞成親王時代の公卿座に当たるとであろう。朝餉には前庇があった⁴⁴⁾ので、朝餉に取り付くかかっての中門の一部を前庇に転用したと考えられる。台盤所は、殿上における儀式で殿上の上戸と台盤所の妻戸が女房や内侍の経路になり⁴⁵⁾、それらは近接していたであろうから、殿上の東側に位置することになる。したがって、南殿とその西の殿上をつなぐことになる部分は、殿上側に台盤所、朝餉側に朝餉前庇となり、応永度内裏でみられた清涼殿南側での殿上、台盤所、朝餉の関係に類似したものになる。

なお、上で述べた建物以外についても触れておくと、対屋は図-1で見られるように、南殿の北西の位置で東西行が7間である。この対屋は貞成親王時代から存続したものであり、その東北には台所⁴⁶⁾が設けられていた。このほか、貞成親王時代・仮皇居時代を通じて番衆所が見られる。仮皇居時代には「東一字〔東上土門内一字、近日号番衆所之在所也〕」⁴⁷⁾とあるので、南殿からは東方に位置していた。貞成親王時代の番衆所も寝殿の東にあった⁴⁸⁾と考えられるので、同一のものと想定される。

以上、仮皇居においては、陣座、内侍所、殿上が新たに設けられたが、貞成親王時代の寝殿が南殿として存続した。しかも、南殿は一部、室名の変化や中門の改造があるものの、間仕切等に大きな変更はなく、貞成親王時代の寝殿の平面が基本的に踏襲されていたと考えられるのである。

4. 上段について

仮皇居時代の南殿の東面は御座敷とも呼ばれ、上段と次段によって構成されていた。時房が天皇に直面した前掲の記事のAの例では、時房は東門から入り、常御所の北側で参賀の由を申し入れている。そして、天皇が上段にいて、時房が簀子から次段に進んでいる。次段には高麗畳が敷き詰められていた。Bの例では、まず次段に行き、それから上段に進んでいる。上段は小文畳が敷き詰められ、天皇は畳上に重ねて置かれた大文畳の御座畳にいと考えられる。畳上は特別であって、円座や板床の場合もあるとしている。

両者の記事によって、東面の床段差は簀子を含めれば、次段、上段の三つの床面からなり、しかも、上段、次段に畳が敷き詰められることがあること、畳の敷き詰めは常時ではなく、板床の場合もあったことが分かる。また、畳が敷き詰められた上段の上に、さらに天皇の御座畳として大文畳が置かれることがあった。大臣と外様の座については「大臣内々御対面之時、可召畳上、外様御前召之時、円座勿論、内々席有畳所、可召畳上也」⁴⁹⁾とあって、座具の違いや内々の席の場合を記している。床の高さや座具の種類がもたらした状況は身分を反映していたといえる。

上段・次段が貞成親王時代から対面の際に用いられていたことは次のような記事から分かる。嘉吉(1443)3年12月より三条実重郎が貞成親王の御所になる⁵⁰⁾が、文安元年(1444)4月28日、そこで時房が対面したときは、「有御対面、可昇長押上之由、〈中略〉於本ノ御所有高下、今無高下、同畳也、仍存至敬」⁵¹⁾とあって、現在の御所に上段・下段がないことを比較している。「同畳也」とは同じ置畳ということではなく、敷き詰め畳による同一の床面を示すものであろう。ともかくこれによれば、畳の敷き詰めが行われていても、上段・下段が装備されていない場合もあったのである。

仮皇居からは少し離れるが、畳の敷き詰めと上段・次段(下段)に関して、この嘉吉3年に移った貞成親王の御所についてさらに見ておきたい。貞成親王の寝殿は5間で⁵²⁾、北側に9間の座敷があり⁵³⁾、殿上を増築し⁵⁴⁾、高欄を造っている⁵⁵⁾。文安元年8月14日、連歌の会があり、「於御座席内撤畳、被敷円座」⁵⁶⁾として、畳を撤去して、円座を敷いている。同4年正月10日、時房が対面したときは、「有御対面、〔御座高麗小文敷爪ノ所也、先入御、〕次親王御方出給、〔同〕」⁵⁷⁾として、高麗小文畳が敷き詰められていた。同年12月、貞成親王に法皇宣下を賀したときには、「先於簀子伺御目、昇長押、即是畳上也、〔小文高麗敷爪也、御座者、高麗大文畳也〕」⁵⁸⁾とあり、敷き詰められた高麗小文畳の上に高麗大文畳が置かれた。また、同5年2月28日に南面で法皇(貞成親王)と主上が対面しているが、「其後於寝殿

南面法皇有御対面、主上南面、法皇東面、式部卿親王西面、〔主上御座重之、高於余云々〕⁵⁹⁾とあって、主上は座を重ねてさらに高くしている。これらのことから、通常の状態では畳が敷き詰めになっている室があったと考えられ、その上に御座畳が置かれたり、連歌の会のように畳が撤去されたりしたものと思われる。

『建内記』の文安4年正月10日条には、時房が参賀のために室町將軍邸、仮皇居、貞成親王邸、さらに、いくつかの公卿邸を訪ねたことを記している。仮皇居、貞成親王邸については先に引用したので、他の例についても触れておく。室町將軍邸の場合で参賀の際、將軍に太政大臣や関白、公卿たちが対面したとき、「摂家人々於簀子受御目参上段、＜中略＞予於簀子伺御目、更起昇長押、於次段中程畳上跪構見参、更起退出、於簀子不立帰也」⁶⁰⁾とある。將軍邸も対面で同様に上段・次段・簀子が用いられていた。ここでは摂家が簀子から次段を介さず、上段に進んだことに留意しておきたい。

梶井門跡（三千院義承）邸において、時房と子息の冬房がともに主人に対面したときは、「有御対面、大文畳ニ居懸テ坐給、予依御目参畳上、〔小文、〕申承祝言了、〔冬房同参御前、紫端畳上〕」⁶¹⁾というように畳に格差が認められる。右府（二条持通）邸において、同様に親子で対面したとき、「右府第、有出座、予上段、冬房次段」⁶²⁾とあって、上段、次段が畳の格差に対応したものとなっている。

時房邸の客亭で、時房が興福寺五師に謁見したときは、五師をかって落庇に着座させていたが、今回は畳の敷き詰められた上段に着座させて、近年は畳の上で同座であると記している⁶³⁾。畳が敷き詰められるようになって、着座の場に変化が生じる状況もあった。

以上から、文安年間頃の上層公家住宅の対面の場では、畳の敷き詰めと上段・次段の装備が見られるが、必ずしもそれが定着しているわけではないといえる。また、上段・次段が畳の敷き詰めの場合と板床の場合があり、畳の敷き方が固定化されてはいなかった。さらに、対面の際、敷き詰められた畳の上に御座畳が置かれることもあった。また、次段に落段あるいは下段という呼称が使われたりすることから、上段の呼称はその低い床部分の呼称に対比する意味合いがあったろう。

ここで、上段の成立に関して既往の見解を検討しておきたい。太田博太郎氏は応仁の乱以前に10間以下の部屋で畳の敷き詰めが多かったとして、畳が敷き詰められて、そこに座す人の身分を示すことができなくなり、上段の間が作られたと推論している⁶⁴⁾。斎藤英俊氏は上段成立に関して、過渡的な形態として下段の成立を指摘し、康正度内裏の清涼殿常御所における下段は庇（平面上の孫庇）から派生しており、その後、床段差が母屋内の一室となることによって成立したと述べている⁶⁵⁾。この

場合、庇と同様に下段が標準的な床高より下がることに注目して、標準的な床高より高くなるような上段の概念は、天正度内裏にはじめて現れることを平井聖氏が指摘している⁶⁶⁾。

応仁の乱以前、文安年間頃の上層公家住宅の動向からすれば、上段・次段といった形で、床面に段差が生じており、そのような場所にも畳の敷き詰めが進展していったと考えられるので、上段の成立が太田氏の見解のように畳の敷き詰め起因するものではないであろう。しかし、両者が融合する前段階には到達していたと推察される。貞成親王時代、先に見たように下段は会所の一部として使われた。仮皇居時代の東面について見ても、上段・次段はすでに一体として使用されている。史料からすれば、両者の間における建具の有無は不詳であるので、居室として同一化したとはいきれないが、使用法と呼称からすれば、両者は当然、強いつながりをもっていたであろう。この位置での上段・次段（落段、下段）の設定からすれば、母屋と庇、さらには孫庇といった旧来の構成で生じていた床段差を残し、それを会所あるいは東面御座敷に取り込み、対面の場の装備として活用した状態になっているといえよう。斎藤氏が康正度内裏の清涼殿で推論したような庇から下段への過渡的な変化は、この貞成親王の寝殿（仮皇居の南殿）の事例ですでに起こっていると考えられるのである。

母屋の標準的な床高という観点からすれば、この上段は一段高くなっているわけではない。室町將軍邸における事例で、摂家が簀子から次段を介さず、上段に進んだ経路から推して、この場合の將軍邸の上段も室内の一部を高くするような上段ではなかったと考えられる。したがって、文安年間頃の上層公家住宅で認められる上段・次段もそのようなものであったろう。一方、畳の敷き詰めが進展し、上段の呼称が成立していることは、その後の展開、たとえば天正度内裏の上段に至る過程の伏線になるであろう。

5. 寝殿（後の南殿）の平面

貞成親王時代、仮皇居時代を通じて、寝殿（後の南殿）は東西行7間、南北行は西側の御末の北側で検討の余地が残されているが、寝殿と呼ぶ室や常御所の部分、さらには会所あるいは東面において6間と考えられた。御末が北側に部分的に飛び出することはまったく可能性がないわけではないが、それを史料的に確認することはできない。現段階では、図-1の御末の北側に描かれていないものがあると憶測するよりは、この図の南北行6間を採って、西側も6間であったと考えた方が妥当であろう。これによって、東西行は西から2間、3間、2間に区分され、南北行は西側で南から1間、2間、2間、1間となり、中央で南から1間、2間、3間となり、東側で南か

図-4 伏見宮貞成親王御所・寝殿の推定復原平面

ら1間、5間といった区分が考えられる。

貞成親王時代の寝殿は、西側で南から公卿座・南御方・御湯殿上・御末、中央で寝殿と称した室と常御所である。東側は南の1間分を南東角ということで持仏堂とすることができ、あとの5間は会所、そのうち北側1間分が下段である。

寝殿の南西に位置した中門については、貞成親王時代から仮皇居時代になって、床板の撤去という改造はあるものの、改築されて位置や規模が変わったということはない。その平面については不明な点があるが、図-1を見ると簀子が西南の隅から2間ほど西に回っているの、中門は西に延び、さらに、「宜陽殿代中門東簀下、〔宜陽殿代当時四ヶ間也〕」⁶⁷⁾とあるので、中門は南に折れ、東側の簀が4間あったと考えて、南の出を4間とすることができる。

以上から、御末の北側や中門の取り付け方法にやや疑問が残るものの、中門の梁行を1間として、貞成親王時代における寝殿の平面の試案を作成すると図-4のようになる⁶⁸⁾。なお、建具については不明な点が少ないが、判明するものを実線、不詳部分については破線で示しておいた⁶⁹⁾。また、貞成親王時代の寝殿は後小松院の仙洞御所の寝殿を移建しているの、その時代までこの平面は廻りうる可能性も考えられる。その仙洞御所の時代ではあるが、『建内記』の応永35年(1428)正月1日条に見られる寝殿異角で御葉が行われ、その後、拝礼が行われたときの記事によって、寝殿の中央3間は部格子であったことが分かる⁷⁰⁾。

仮皇居時代は、南御方が議定所、公卿座が朝餉という室名になり、会所は東面あるいは東面御座敷と呼ばれ、常御所、御湯殿上、御末の室名は引き継がれている。ま

図-5 仮皇居・南殿の推定復原平面

た、晝御座、学問所という呼称も使われているが、この2室の位置を確定する記事は先に掲げたような日記類に見当たらない。川上氏は貞成親王時代の寝殿を小さい内裏寝殿の定型化したものとして、南面中央の寝殿と呼ばれた室を晝御座に相当させている⁷¹⁾ので、仮皇居時代の南殿の晝御座も同様に考えることができよう。その場合、南殿の南東、かつて持仏堂であった部分の室名が不詳のまま残るので、しいてそこに室名を当て嵌めれば学問所ということになる。

貞成親王時代の中門の一部には朝餉前庇、台盤所が設けられた。中門の床板が撤去されたところはその南の部分であつたろう。さらに、その東側に軒廊が設けられた。殿上は図-1で見られるように南殿の西に建っていた。殿上の東西行および南北行の間数は不詳だが、南北行の間数については台盤所に行くので、梁行1間とすることができる。ここには簀子⁷²⁾、小板敷⁷³⁾、沓脱⁷⁴⁾が配されていた。応永度内裏の殿上も台盤所につながり、南北行が1間で、南側にやはり小板敷、沓脱を配している。以上によって仮皇居時代の南殿の平面を推定した試案が図-5である。

貞成親王時代および仮皇居時代を通じて寝殿(南殿)の規模は東西行7間、南北行6間であった。これは、書院造の例としてよく用いられている、慶長13年(1608)の『匠明・殿屋集』⁷⁵⁾にある「昔六間七間ノ主殿之図」と規模的に対応する。両者の平面構成を比較してみると、東西行が3分割され、南北行で2分割するような間仕切の方法は類似している。

一方、寝殿(南殿)が南側中央を晝御座に用い、修法始行などの儀式において主室として保たれているのに対し、主殿の図では上段の間の次の間で、主室としての役

割を果たしていない。永禄4年(1561)、将軍御成の様子
が伝えられる三好義長邸⁷⁶⁾では、「九間の座敷」、す
なわち中央間が対面の場となるので、この例ではまだ主
室としての重要性が薄れていない。この寝殿(南殿)や
三好義長邸に比べて主殿の図の方がより新しい傾向をも
つといえよう。また、上段の装備が中門から見て奥の居
所にある点で、寝殿(南殿)と主殿の図は類似するが、
前者では次段(下段)が上段の背面側にあり、後者では
上段の手前に下段があるので、格差を生じる方向性がま
ったく違っている。

主殿の図は、床・棚・書院などの座敷飾りが身分の上
下関係を反映する対面の場に相応したものとして再編さ
れ、その配置・構成が定型化している。上段についても
通常の床高より一段高くして、そこを上段の間とし、さ
らに、通常の床高からなる次の間を付属させている。中
門から上段と、下段から上段の方向とを一致させ、座敷
飾りと一体となって、身分差が方向と高さで明示的に表
現されているのである。一方、寝殿(南殿)においては
中門から上段の方向と、次段(下段)から上段の方向と
が逆になるため、次段(下段)は局部的であるといえる。

6. 結

室町期、貞成親王時代および仮皇居時代の寝殿(南殿)
について、当時の日記類を用いて平面の復原を試みた。
両時代を通じて、規模は東西行7間、南北行6間と考え
られ、平面構成においても大きな相違はなかった。南面
中央に寝殿と称した晝御座、その背面北側に常御所、西
側で御湯殿上、御末など共通している。東側部分も同様
であるが、貞成親王時代には会所、仮皇居時代には東面、
あるいは東面御座敷と呼ばれた。そこに上段・次段(下
段)が設けられ、次段の方が一段低い形状を呈していた。
さらに、後者では畳の敷き詰めが確認されたが、畳が撤
去されて板床の場合もあった。ここで認められたような
上段・次段の装備と畳の敷き詰めは応仁の乱以前、上層
公家住宅では進展しつつあるが、まだ一般的ではなかつ
たと考えられる。

東西行7間、南北行6間の規模は『匠明・殿屋集』の
「昔六間七間ノ主殿之図」に対応している。平面を比較
すると、東西行が3分割され、南北行で2分割するよう
な区分の方法は類似しているが、南面中央の室の重要性
は寝殿(南殿)に認められ、主殿の図では次の間として
付随的である。上段・下段の位置関係からすれば、両者
は逆の方向性にあり、また、寝殿(南殿)の上段は主殿
の図に見られる上段のように一段高くしたものではない。
平面構成の基本的な性格で両者は異なっているのである。

したがって、貞成親王時代、仮皇居時代の寝殿(南殿)
に認められるような室町期の上層公家住宅から、『匠明』
の昔の主殿の図のような書院造の平面へと展開するには、

規模や間仕切を踏襲しつつも、身分差を反映する対面の
場に相応したものとして、床・棚・書院などの座敷飾り
と同様に上段が形式的、明示的に再編される必要がある。
さらに、その変遷にともない平面全体の構成を整備する
事態がなければならないと考えられる。

注記

- 1) 川上 貢『日本中世住宅の研究』pp. 191-6、墨水書房、1967年
- 2) 上段の成立に関しては諸説がある。主なものに、
太田博太郎『書院造』東大出版会、pp. 41-51、1966年
斎藤英俊「近世以前の内裏における清涼殿内常御所の形
態について(上段の成立過程の研究—2—)」日本建築
学会論文報告集第244号、pp. 89-98、1976年6月
平井 聖「書院造について」日本建築の特質、太田博太
郎博士還暦記念論文集刊行会、pp. 339-62、1976年
- 3) 間中は太田博太郎氏の解釈によれば、現在言うところの
便所(川上貢前掲書)。
- 4) 『看聞日記』(宮内省図書寮刊翻印本)永享8年7月7日条
- 5) 同上永享8年6月11日条
- 6) 同上永享8年8月29日条
- 7) 同上永享8年5月15日条
- 8) 同上同月21日条
- 9) 同上永享8年2月4日条
- 10) 川上貢前掲書、p. 193
- 11) 『看聞日記』嘉吉3年11月9日条「陣座可被建地形破之、
〔中門外、南築地際、〕」
同月12日条「陣座立柱」
同月13日条「陣座早速造畢」
同月27日条「内侍所立柱、〔寝殿巽角〕」
同年12月2日条「今日殿上立柱被新造」
同月7日条「内侍所殿上陣座等見廻、造作大概周備也」
- 12) 『康富記』(増補史料大成)嘉吉4年正月6日条、同月
16日条、文安元年7月22日条、同5年正月16日条、同月
26日条、享徳3年正月16日条、『建内記』(大日本古記
録)文安4年正月5日条、同月7日条、『師卿記』(史
料纂集)文安3年4月29日条
- 13) 『康富記』文安5年正月26日条「此皇居一殿之故也」
- 14) 『康富記』文安5年正月1日条「此皇居御殿缺少」
- 15) 『看聞日記』嘉吉3年11月3日条「陣座可被建地形破之
〔中門外、南築地際、〕」、『康富記』嘉吉3年11月30
日条「陣座被新造者也、西面四足内南脇被造之、南北行
二ヶ間、東西行三ヶ間也、為北面」
- 16) 『康富記』文安元年9月9日条「此皇居無宜陽殿代」、
同4年9月9日条「以陣座為宜陽殿代」
- 17) 『康富記』文安5年正月7日条「装雨儀御装束者也、宣
命版置宜陽殿代中門東簷下、〔宜陽殿代当時四ヶ間也、
当中央、〕公卿参列拝舞在所、於中門内北脇宜陽殿代土
間被行之」
- 18) 『康富記』文安元年5月22日条「此皇居、軒廊自初無之、
仍節会時仮雖被葺出簷、尚不如常、其上在中門之内」
- 19) 『師卿記』文安2年3月23日条「今夜依雨儀、筥文公卿
立所宜陽殿土庇代〔軒廊分敷、如何〕」、『康富記』文
安5年正月7日条「依雨中門内北脇宜陽殿代土間也」
- 20) 『師卿記』嘉吉4年正月6日条「於中門廊下〔旧冬被撤
板敷〕」、文安元年3月28日条「中門廊、〔令撤板敷〕」
- 21) 『看聞日記』嘉吉3年11月27日条「内侍所立柱〔寝殿巽
角〕」
- 22) 藤岡通夫『京都御所〔新訂〕』中央公論美術出版、1987年

- 23) 朝餉は『康富記』嘉吉4年正月16日条、文安4年12月15日条、『建内記』文安元年4月18日条、同4年正月5日条。
台盤所は『建内記』文安元年4月21日条、同4年正月7日条、同年4月10日条、『康富記』文安4年11月27日条。
議定所は『建内記』文安元年4月21日条、文安4年正月10日条、『康富記』宝徳元年8月28日条、同年11月28日条、享徳3年正月16日条、『綱光公記』（『歴代残闕日記』第18巻）享徳3年6月17日条。
晝御座は『康富記』文安4年12月15日条、『師卿記』享徳元年7月25日条。
学問所は『実熙公記』（『歴代残闕日記』第16巻）享徳2年3月12日条。
- 24) 常御所は『建内記』文安4年正月10日条、同月23日条、『綱光公記』享徳2年3月27日条（日付は四月の四の文字に抹消符が付けられ、三に修正されている）、『康富記』宝徳元年7月7日条。
御湯殿上は『建内記』文安4年正月23日条、『実熙公記』享徳2年3月12日条、『綱光公記』享徳3年6月17日条。
御湯殿末は『建内記』文安元年4月21日条、同4年正月23日条。
- 25) 『綱光公記』享徳2年3月27日条（日付については注24参照）
- 26) 『実熙公記』（『歴代残闕日記』第16巻）享徳2年3月12日条
御装束
其所北面廊簾台、〔当時如議定所狭少不叶仍被用此處、〕東西四ヶ間西南北三面各有覆御簾、西第一間、〔長押一段高是御湯殿上云々、〕南北行數大文高麗端帖二枚、其上供御茵為御座、同第二三四間〔長押下、〕南北对座數小文高麗端帖為公卿座、〔親王大臣对座与納言座絶席、〕公卿末長押東去二三尺許數円座為殿上人座、御座間左右〔長押下〕及公卿座末〔南方〕立高灯台供掌灯
（『実熙公記』は『歴代残闕日記』の第16巻と第18巻に同内容のものが納められている。ともに写本であるが、前者は後書によれば自筆正本の写しとある。この両者には「東西四ヶ間」の部分で相違があり、後者では「東向四ヶ間」となっている。内容から判断しても、「東西四ヶ間」の方が適切と考えられる。）
- 27) 『建内記』文安4年正月23日条
予教訓曰、面々祗候之所へハ女孺ハ不可参候、女官ヲ召テ可被仕候、仍〇（彼）令退女孺了、如此事、禁中之作法、面々更不弁先規也、＜中略＞禁中細々内々之儀ハ、非近習之輩ハ更不知事也、凡女孺ハ常御所ノ御縁ヲハ不通也、＜中略＞（女房）下臈〔蔵人事也、〕モ〇（常御所ノ）庇ヘハ不参也、台所別当〔命婦〕ハ庇マテハ参スルナリ、＜中略＞女官など常御所ノ御通ナトヘ被召ル、事、更無之、但主上密々御湯殿ノ上まで渡御アリテ、隔ノ遣戸アケさせられて、女官ともに酒ノマセテ観覧ノ事ハ、乗興臨時之處分、後小松院御宇拝見了
- 28) 『建内記』文安2年10月14日条、同4年正月10日条、同年9月15日条
- 29) 『建内記』文安2年10月14日条
図-2は柱が角柱になっている。図-3では角注、円柱のどちらか判然としない。本稿の論旨には影響しないが、今後、検討したい点である。なお、『綱光公記』の図-1では円柱で表現されている。
- 30) 『建内記』文安2年10月14日条
- 31) 同上
- 32) 『建内記』文安2年10月19日条
- 33) 『建内記』文安2年10月14日条
- 34) 図-2で東西行と南北行の柱間を比較すると、東西行の柱間1間が大きく表現されているが、底本所収の図-3ではこれほどの相違はない。日記類の指図の常として厳密に採寸されているわけではないので、柱間の大きさを数値的に論じることは難しいが、東西と南北の柱間寸法の相違はありえたかもしれない。
- 35) 国立公文書館・内閣文庫蔵の他の『御儀法講部類』（写本）や『建内記』（写本）を見ても、図-2ほど大きくなく、図-3と同様である。底本となったものを含めて、いずれも写本なのでそのまま信用することはできないものの、図-2の各柱間をあらためて比較検討してみても、2間以上あったとするよりは1間とした方が妥当であると考えられる。
- 36) 『建内記』文安4年正月10日条
- 37) 『建内記』文安4年9月15日条
- 38) 『建内記』文安4年9月15日条
- 39) 『建内記』文安4年3月9日条
- 40) 川上貢前掲書、p.193
- 41) 『看聞日記』永享8年8月29日条「其後按察已下着座、〔会所下段、〕」の按察は按察大納言を示していると思われる。
- 42) 『看聞日記』永享10年5月19日条
- 43) 『康富記』嘉吉4年正月16日条「被通朝餉前殿上上戸辺」、文安4年12月15日条「近年内々朝餉間御出座也、為晴儀可拝天顔之由、殿下被申之間、於晝御座有御対面」、また、『建内記』文安4年正月7日条に一部欠損文字があって、校訂者が「当時皇居□□□□（朝餉前階カ）事也、元公卿座前階也、以之為南殿昇降之階也」と推定している。
- 44) 『建内記』文安元年4月18日条「朝餉前庇」
- 45) 『建内記』文安元年4月21日条「経上戸、就台盤所妻戸簾下付内侍奏覧」、『康富記』文安4年11月27日条「殿上餐膳兼居之、吉書加賀国御封米解文也、奉行院司覧第一別当之後、於台盤所付女房奏聞」
- 46) 川上貢前掲書、p.195
- 47) 『建内記』文安2年10月14日条
- 48) 『看聞日記』嘉吉元年3月4日条に「番衆所庭梅盛之間、行覧之、連歌張行」とあって、翌5日条には「（寝殿）東面梅盛殊勝也」とある。両者を勘案すると、番衆所の位置は寝殿の東側と推測される。
- 49) 『建内記』文安4年正月10日条
- 50) 川上貢前掲書、p.192
- 51) 『建内記』文安元年4月28日条
- 52) 『看聞日記』文安5年正月1日条「寝殿五間」、同月26日条「寝殿庇五間」
- 53) 『康富記』嘉吉4年正月7日条「北端九間御座敷」
- 54) 『康富記』文安4年11月27日条「仍此亭為伏見殿御在所、此第依狭少、近日有御造作、被作繼殿上」
- 55) 『看聞日記』文安4年12月25日条「寝殿高欄令作」
- 56) 『康富記』文安元年8月14日条
- 57) 『建内記』文安4年正月10日条
- 58) 『建内記』文安4年12月1日条
- 59) 『康富記』文安5年2月28日条
- 60) 『建内記』文安4年正月10日条
- 61) 同上
- 62) 同上
- 63) 『建内記』嘉吉2年4月29日条「当時為數爪之間、皆以坐高麗端、可云過分哉、先年之比、五師（着）坐落底座、

今五人列参、弥狭少、仍招引其上段、予猶在其奥座〔高麗小文量數爪也、〕＜中略＞奏之時見及分、招引其畳上、
o（不隔物）同座也、近年如此哉」

64) 前掲書、p. 51

65) 前掲論文、p. 96

66) 前掲論文、p. 353

67) 注17と同じ。

68) 注34で述べたように東西行と南北行の1間の柱間寸法が異なることが考えられる。ただし、そこでも述べたように日記類の指図から柱間寸法を抽出することは難しいので、柱間寸法を復原平面図で表現することは考えてない。その意味で模式的な図である。次の図-5も同様である。

69) 図-1の南2間分に蔀戸のような表現がみられるが、「遣戸」の書入れがある。伏見宮貞成親王時代、「番匠参、西向〔南御方前〕日隠令釣、」（『看聞日記』永享8年5月2日条）とあるので、蔀戸とは異なっていたと考えられる。その後も「日隠」が設けられ、それが図-1に見

られるような表現になったと考えることができることもあって、「遣戸」の書入れを採った。

70) 『建内記』応永35年正月1日条「寝殿垂庇御簾、〔但中三ヶ間外下格子〕」

71) 川上貢前掲書、p. 194

72) 『康富記』文安4年11月27日条「於殿上簀子」

73) 『康富記』宝徳元年11月28日条「経殿上小板敷」

74) 『建内記』文安元年4月21日条「昇殿上沓脱脱沓」

75) 東京大学工学部建築学科所蔵。

主殿の図を取り上げた主なものに伊藤要太郎『匠明五巻考』（鹿島出版会、1971年）、太田博太郎前掲書（pp. 16-22）などがある。

76) 『三好筑前守義長朝臣亭江御成記』群書類従、巻第409。三好邸を取り上げたものに堀口捨巳『書院造りと数寄屋造りの研究』（pp. 567-76、鹿島出版会、1978年）、平井聖『日本の近世住宅』（pp. 56-64、鹿島研究所出版会、1968年）がある。

（1994年11月10日原稿受理、1995年5月1日採用決定）